

政策の‘個人化’をどう乗り越えるか？

——英国とフィンランドの経験に学ぶ——

平塚 眞樹

(法政大学)

●「キャリア教育」をめぐる政策動向

周知のように、文科省は中央教育審議会大学分科会（第二次報告、2009年8月）による大学における「職業指導（キャリアガイダンス）」（2009年8月）の制度化提言を受けて、本年2月に大学設置基準の一部を改正し、下記一項を追加した。（2011年度より施行）

「(社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制)

大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

一方現在審議中の中教審キャリア教育・職業教育特別部会では、第二次審議経過報告（2010年5月）で、学校から社会・職業への移行が円滑に行われない原因・背景には、社会全体の構造的問題があり、したがって、単に子ども・若者個人の責任にのみ帰結させても問題解決には結びつかず、産業振興や雇用対策などが不可欠であることを前提としたうえで、「学校教育は、学校から社会・職業への移行に係る課題を克服し、社会環境が複雑化・多様化する中であっても、社会人・職業人として自立できる人材を育てるという社会的な要請にこたえていかなければならない。このため、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であるキャリア教育と、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」である職業教育について、改善や充実を図る必要がある。」とした。そして、キャリア教育で育成する主要能力として、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を挙げた。

●本報告の課題

従来からの学校教育に対して、それが子ども・若者の人生や生活の文脈から切り離された知に陥っていないかと問い、学びの再文脈化を求める声が社会から出されるのは、固有日本の学校教育システムの特質にかんがみても、また PISA や「コンピテンシー」論に見られる後期近代における教育課題にかんがみても、十分理解できることであり、「キャリア教育」論の台頭にもそうした背景が一脈あることは認識すべきであろう。しかしながら同時に目を向けるべきは、それが実際に、これからの時代・社会

を生き抜く子ども・若者を社会的存在に育むアクションたり得るのかという点である。

その点で報告者がこの間気がかりであり続けているのは、キャリア教育をはじめ近年の若者政策が、子ども・若者の社会化を問うているにもかかわらず、一貫して‘個人（行為主体＝agency）’へのアプローチを重視した、‘個人化（individualization, personalization）’志向を強く有していることである。‘ひとの社会化を保障するには、政策含めた育ちの環境そのものが「社会化」されている必要がある’という素朴な仮説を対置して、本報告では、とりわけ agency-based な傾向を強く有していたと考えられる、英国における新労働党政権期（1997年-2010年）の若者政策の経過（特にコネクションズ）と、それと一定のコントラストをなしうるフィンランドの若年移行期の社会システム（特にワークショップ）をとりあげ、政策の個人化志向を今日どのように乗り越えうるのか？ 考える視点を提示したい。

●労働党政権（1997-2010）下英国における若者政策の経過 ～コネクションズ

ここでは、若者政策の中核をなす機関として 2001年に導入されたコネクションズ（Connexions）に着目したい。コネクションズは、従来からのキャリアサービスを引き継ぐ包括的若年支援サービスの機関として、とりわけ 16-18歳の NEET 層の減少を目的として設置されたが、結果的に NEET 層減少はままたらななかった。報告では、その導入・実施過程で交わされた、キャリアサービス関係者、あるいは隣接領域としてサービス統合化が要請されたユースワーク（Youth Work）関係者からのコネクションズ・アジェンダへの疑問・批判を通して、今日の若者支援をめぐる論点を提示したい。

●フィンランドにおける若年移行期の社会システム ～ワークショップ

他方フィンランドについては、やはり 10代の無業の若者の移行支援の場として近年顕著に拡張しつつあるワークショップ（Workshop）という制度に着目したい。これは、ドイツ、デンマークの生産学校（Production School）の流れを汲むもので、‘移行的労働市場（transitional labour market）’と呼ばれる、社会（労働市場）への不参加からフル参加への間をつなぐ、中間的な場である。この制度の背景・基盤をなす、若年期の移行支援の社会システム全体にも視野を向けつつ、ワークショップ・アジェンダの特質をコネクションズと対比したい。